

Title	序(脱芸術/脱資本主義：半プロダクション礼賛)
Sub Title	
Author	熊倉, 敬聡(Kumakura, Takaaki)
Publisher	
Publication year	1999
Jtitle	Booklet Vol.4, (1999.) ,p.3- 10
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000004-04211153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

熊倉敬聡

この文集は、今までの生活とはやや異なった生活のスタイル、そして人の集い方を模索するものである。

しかし、その生活、集い方は、本書のタイトルが若干の人々に連想させるかもしれぬ、いわゆる「共産主義」や「反芸術」とは（全く関係がないわけではないにしろ）直接的な関係をもつわけではない。それは、ノスタルジックな、システムあるいは反システムのユートピアを求めているわけではない。

<脱芸術／脱資本主義>とは、「資本主義」という現実、「芸術」という現実を認めつつも、しかしそれらに全面的に浸されるのではなく、それらの傍らで、それらに寄り添いつつ、ある異なった生活のスタイルをも享受しようとする。そのスタイルとは、端的に言って、<半>端なものを生活のあらゆる位相で積極的に認めていこうというものである。「頑張って」できる限りのエネルギーを注ぎ、ある「生産物」なり「作品」なりを「完成」しなくてはならないという近代の労働の在り方に対して、必ずしもそのように模範的に頑張らない（あるいは頑張れない）人々の活動、「完成」の「途上」と見えるかもしれぬモノ作りをも積極的に肯定していこうとする立場である。副題の<半プロダクション>という我々の造語は、おおよそそのようなことを意味している（詳しくは後ほどの用語説明、および本文集の筆者たちの解釈を参照されたい）。

しかし、<脱芸術／脱資本主義>は、「資本主義」的労働や「芸術」的労働ができない「脱落者」や「弱者」に温かい手を差し伸べましようという、「ヒューマンイズム」という名の情緒的植民地主義を意味するわけではない。それは、人間の活動の中に、貨幣という価値でもなく、美という価値でもない、ある別な価値を見出そうとする。できる限りお金を稼ごうとか、できる限り美しくしようという視点、すなわち「資本主義」、「芸術」という視点から見れば、「半端」、「下手」、「未熟」等々と

見えるかもしれない活動でも、その活動主体たちにとってかけがえのない生の喜びをもたらすものならば、そのような価値（それは<幸福>という価値だろうか？）を尊重していこうとするものである。

「資本主義」的価値、「芸術」的価値から<脱>するもう一つの未知の価値を求めて、この2年弱、ほぼ毎月、我々は研究会を重ねてきた。もちろん、今のところ、結論が出たなどという状況からはほど遠く、この文集自体一種の<半プロダクション>となっている。我々の思考のとりあえずの痕跡として、この文集をお読みいただきたい。

*

以下、私になぜ（同じくアート・センターの所員である池田とともに）このような研究会を立ち上げるようにいったか、その思想的背景を簡単に説明しておきたい。（以下の議論はある程度研究会の他の参加者にも共有されているかもしれないが、あくまで私自身の背景である。）

誰もが知っているように、昨今の資本主義経済は、ますます「実体経済」からの遊離の度を強め、世界的な投機マネーの乱流に踊らされているように見える。そこでは、そのようなマネーの市場に参加できる、世界的にみてごくごく一部の組織ないし個人がその多大なる恩恵に浴し（あるいはそこからの災厄を被り）、残りの地球上の人間たちはその天から降ってくる粉塵のごときものにしか関わりを持たない（あるいはそのような粉塵にすら関係しない）。貨幣価値の分配のこのような二極分裂——例えば、ニューヨークの「スーパーリッチ」たちの資産とその直接的・間接的「召使い」*1たちの生活費を同じ「ドル」という貨幣単位で換算すること自体「天文学的ペテン」*2ともいえるものだ。

このようなマネーのトランスナショナルな「乱流」と見えるものに対し、よくささやかれることは、それを抑制しきれぬ「国民国家」の無能力という命題である。しかし、実際は、今でもなお、マネーの自己増殖と国民国家は、共犯者、資本主義の二大共犯者であることにはかわりはないのではないだろうか。マネーは、自己を絶えず内的に差異化＝微分化していくことにより増殖していくが、もちろん単に「国民国家」がなければ外為市場自体が成立しないだけでなく（つまり通貨間の差異が生成されないのみならず）、国民国家の様々なレギュレーションの装置が半ば無能力な形で（すなわち完全に無能力でも万能でもなく）マネーの自己増殖に介入してはじめて、マネーは決定的なカオスから守られているのではないだろうか。

いずれにしても、マネーの暴走せんとする流れとそれをいわば「半能的」に抑制せんとする国民国家の交響が織りなす資本主義が続くかぎり、「二極分裂」、「天文学的ペテン」はますます助長されるにちがいない。そして、資本主義は、ここ当分終わりそうもない（たぶん）。

一方、「芸術」の現在はどうであろうか。この、資本主義と並んで「近代」が作り上げた「芸術」は、資本主義の繁栄に比べ、はなはだ弱々しいものとなっている。それはもはやそれ自体としては「死んだ」と断言してもいいようなものだ。

「芸術」は、近代の社会において、資本主義の〈外部〉を希求するものとして、資本主義的価値のシステムが手の届かぬ彼岸に「美」という名のもう一つの価値を掲げることにより成立した。「芸術」は、その〈外部〉＝「美」に向けて、資本主義的社会の様々な記号のシステムを感覚の脱記号的強度により内在的に限界へと連れだしながら、その〈外部〉の深淵の縁で多くの「傑作」を生み出した。

しかし、20世紀に入ってから、まず「反芸術」という爆撃を浴び、その「美」という価値の無根拠性を徹底的に暴かれ、一度は完全に葬り去られたかに見えたが、第二次大戦後、ある種のアーティスト、評論家などにより、「モダニズム」という名称の下、執拗な墓暴き、「芸術」のネクロフィリアが行われた。だが、彼らの努力にもかかわらず、一度死したものは蘇らず、逆にそれ以降もあえて「芸術」と自らを僭称する作品は、「芸術」の亡霊とあの手この手で戯れたのであった。そのような「芸術」の亡霊の膨大なサイクルが、あるときは「ポストモダン」などと不用意にも呼ばれたのであった。

芸術的価値＝美は——マネーの「ビッグバン」のいわば対極で——このように自らの〈外部〉、「ブラックホール」へと限りなく収縮していったが、しかし、それと反比例するかのように美という価値の大暴落を社会に吐き出した。「(サブ)カルチャー」や「デザイン」などと呼ばれるものの総体である。モノ作り、情報作りは、もはや使用価値×交換価値という古典的な欲望の動機づけではなく、広告の言説などを通じた記号的、象徴的な差異化によって大衆の消費欲を繊細に煽っていった。そして、80年代後半から急速に普及し始めたコンピューターという新しいテクノロジーが、この差異化の「編集」作業を高度化するとともに、インターネットを筆頭としたメディアの世界的広がりが、「グローバリゼーション」というアメリカ的神話の下、膨大な「(サブ)カルチャー」の生産を、資本主義のトランスナショナリズムに接続した。

世界の市場が加速度的に相互依存を強める現在の資本主義の不安定性に対し、例えばレギュラシオン学派の旗手ロベール・ボワイエなどは、ラテンアメリカ発の「世界恐慌」の可能性を示唆する*³。果たして本当に、資本主義（そしてそれにおそらく連動して「(サブ)カルチャー」）の地球的な、そして決定的なカタストロフィがいつか起こるのだろうか。しかし、1929年の大恐慌を持ち出すまでもなく、資本主義の発展とは、つねにそれ自体の危機を内包する類のものではないだろうか。ジャン・ボードリヤールも言うように*⁴、局所的なカタストロフィの発生や全体的なカタストロフィの潜在化が、逆に全体的なカタストロフィの現実化

を抑止し、そのような決定的なカタストロフィへの防衛手段を発達させるとともに、資本主義のさらなる発展をもたらすという逆説が、資本主義にはもともと内包されているのではないだろうか。しかし、「歴史」はわからない。誰が、これほど速やかに、ベルリンの壁が、ソ連の共産主義が崩壊することを、予測し得ただろうか。いずれにしても、我々は当分の間（それが50年か、500年かわからないが）、ますます高度化する資本主義と、それと連動して繁茂する似非「美」的価値に圍繞されながら、生活を送らなくてはならないのだろうか。それとも、何か別の選択の可能性があるのであろうか。

私には、その可能性があるとされる。事実、そのような動きが今や地球のあちらこちらで発生しようとしている。剰余価値の極大化や国民国家の使命を必ずしも目的としない、様々な組織、ネットワーク、つまり「NPO」、「NGO」、「ヴォランティア活動」などと呼ばれているものの広がり。あるいは、資本主義的企業内部での非営利的活動の展開（「フィランソロピー」や「メセナ」など）、または、市民にイニシアティブを託す形のある種の「文化政策」や「環境政策」の推進、などが、色々な問題や矛盾を抱えつつも、＜脱資本主義＞的ベクトルを描きはじめようとしている。そして他方では、未だにとりあえずは「芸術家」と呼ばれている人々の中から、単なる「芸術」的作品でもなく、また似非「美」的モノ・情報作りでもないような、ある創造と交通の新しい形、＜脱芸術＞が生まれつつあるように思われる。しかも、その＜脱芸術＞的ベクトルと＜脱資本主義＞的ベクトルは多様に交錯しながら、資本主義と「カルチャー」の傍らで、それらに寄生しつつも（「オルタナティブ」ではなく「パラ」！）、貨幣でも擬似的美でもない別な「価値」で動機づけられた生活の様式を今や再デザインしようとしている。それは、宇宙の変形としての「クリエイション」と、その、他者との「コミュニケーション」を、根本的に見直そうとする動き、そして選択である。

「グローバリゼーション」という神話への信仰が推し進めんとしている、資本主義と「カルチャー」の新たな植民地主義の傍らで、＜脱芸術／脱資本主義＞的生活ははたして今後どれだけの市民権を得ていくことができるのであろうか。

*

ところで、本文集には聞き慣れない若干の言葉が出てくる。それらは、研究会の議論の中から自然発生してきた一種の造語である。読書の便宜のため、簡単に説明しておきたい。（しかし、以下の説明は、私自身の解釈であって、研究会のメンバー全員が同様の解釈に基づいているとは限らない。）

<半プロダクション>：先ほども言及したように、ある目的（資本主義ならば経済的価値の実現、芸術ならば美的価値の実現）に向かって、可能な限りのエネルギーを注ぎ——すなわち「頑張る」——「生産物」なり「作品」なりを「完成」しなくてはならないという近代の労働の形＝「プロダクション」に対して、そのような目的論的かつ限界主義的なエネルギーの充当を積極的に諦め、(近代的労働の視点からは)「半端」、「下手」、「未熟」としか見えぬ活動も、その主体にとってかけがえのない喜びをもたらすものならば、それを尊重するというもの。

<半組織>：近代的「組織」が、経済合理性によって運営されるシステム、すなわち、ある目的に向けて物的・人的資源をできる限り効率よく運営するために、それらの要素に明確かつ専門化した機能を与え、その全体を整合的に統合したシステムであるのに対し^{*5}、<半組織>は、経済合理性によって必ずしも運営されないシステム、というよりネットワーク、つまり、1) 目的に向かって活動を求心化、効率化することを至上命令としないため、(「組織」の視点からは)「脱線」「無駄」「遊び」と見えるものもその活動にとって必要であるなら積極的に取り入れていく。2) 物的・人的要素を必ずしも機能化しない、すなわちそれらに固定的で専門的な役割を強制しないため、それらの要素は状況に応じて役割を変えたり、横断的な役割を演じることができる。3) (「組織」が高度化すればするほど排他的になる傾向があるのに対し)、それは逆に活動を動機づける価値および活動のもたらす喜びを共にしうる者ならば、原則的に誰でも受け入れる。したがって、その内部と外部の境界線はきわめてゆるやかなものであり、活動の内容や環境の変化に伴い柔軟に変化する。従って、<半組織>とは端的に言って、その活動が<半プロダクション>であるようなネットワークである。

<複属>：資本主義社会においては、人間の組織への関わり方はいたって「専属」的である。それは極端な場合、父：会社＋家庭、母：家庭、子：家庭＋学校、という簡単な図式に還元できるほどだ。各々は、一つないし二つというごく限られた組織にしか属していないために、そしてその組織内においても固定的な役割しか与えられないがために、世界観・価値観がきわめて単眼的になりやすい。それに対し、<複属>とは、一人の人間が文字通り「複」数の組織ないし半組織に所属することであるが、彼の所属するそれらの(半)組織は同質のものではなく、違った内容・形・価値をもっていて、また、それらの(半)組織内で彼自身の役割もそれぞれに異なっている、という関わり方である。それは従って、一人の人間に複眼的な世界観・価値観をもたらさう。

*

本文集には、研究会のメンバーがそれぞれ一つないし二つの文章を寄

せているが、以下、その内容をごく簡単に紹介したい。

足立典子の「道具のなかの道具・武器のなかの武器——MONEY & MAN」は、「アーティスト」ボグスが「貨幣だと自己主張する芸術作品」をパフォーマンス化する様子を収めた映像作品『マネー・マン』を分析しつつ、「作品」とは？「作者」とは？「本物／偽物」とは？芸術／貨幣の価値とは？という根本的な問いがめくるめくような形でそのパフォーマンスに籠められていることを指摘する。そして、そこに、二つの逆説——「芸術」も「貨幣」もそれ自体無根拠であるがゆえに存在し続けるという逆説——が映し合っている様を摘出する。

池田幸弘の「高度大衆消費社会と音楽批評——古典的美学と脱芸術とのはざままで——」は、日本の音楽批評、特に吉田秀和と高橋悠治の批評を取り上げ、演奏の「オリジナル」と「コピー」、演奏家の個性とその喪失等々といった問題をめぐり、その両者の間に、古典的美学と脱芸術の典型的な対立を見る。その対立は、池田自身の「引き裂かれた耳」でもある。

沼田美樹の「アートと社会——ケース・スタディ：スタジオ食堂」は、現代日本社会では人間同士のコミュニケーションというアート本来の役割が果たされていず、ゆえにアートと社会をつなぐ何らかの「メディア」が必要であるという認識に基づき、そのようなメディアのまれなケースの一つとして、自らが運営スタッフを勤めていた「スタジオ食堂」（以下「スタ食」と略す）という一つの実験をスタディする。沼田によれば、スタ食は、脱芸術的かつ脱資本主義的なく半組織>という性格をもったメディアである。しかし、そのような希有な実験も活動休止に至る。その問題点をも合わせて考察する。

この沼田のケース・スタディに対し、研究会のメンバー二名がコメントを寄せる。

まず、伊藤裕夫の「スタジオ食堂とく脱芸術／脱資本主義——沼田論文へのコメントとして——」は、自らの、この研究会に参加した個人的な動機を述べたあとで、沼田の「コミュニケーションの媒体」としてのアートという認識を受け、特に舞台芸術において、公衆による芸術の価値づけがどのように歴史的に変化したかを概観する。そして、スタ食のなかに、ジャン＝リュック・ナンシーが言う意味でのく無為 (désœuvrement) >^{*6}の実践をみるとともに、「非営利」は必ずしも直接的にく脱資本主義>を意味しないことを指摘する。

次に池田の「沼田美樹論文によせて」は、アソシエーション一般における「マネージメント」機能の重要性と、各個人が複数のアソシエーションにく複属>することの意義を強調したあとで、スタ食の具体的なマネージメントとその問題点を経済学的視点から分析する。

西村淳の「脱資本主義的生活と『民衆の平和』」は、イリイチを援用しながら、「平和」の概念が産業化の進展と共に「民衆の平和」から

「ボックス・エコノミカ」へと変遷していったことに注目する。そして、「脱資本主義的生活」が果たして今までの「組織」（企業、非営利組織）で達成できるかどうか批判的検討を加えたあと、そのような「生活」は〈半組織〉と共に始めて可能になると結論する。

石橋源士の「脱資本主義的生活とは」は、自らが「脱資本主義」という言葉に惹かれる理由を、資本主義においては生活基本OSが「市場経済」に一元化されていて、それに皆が従わなければならないことに見出す。彼が何度となく滞在した壁崩壊前の西ベルリンでは、その例外的政治状況が、逆に、様々なライフスタイルの共存を許していたことを指摘する。石橋がとりあえず考える「脱資本主義的生活」とは、複数の生活基本OSないしローカルマーケットが社会の中に併存し、そこから個人が自分のライフスタイルを自由に編集できるような生活である。

熊倉敬聡の「来るべき<幸福学>へのノート——頑張らなくもいい社会に向けて——」は、ジャン＝リュック・ナンシーの共同体論とアンドレ・ゴルツの労働論との対話を試みつつ、以下のようなテーマに関し断章を書き綴る。共同体の作品＝営為とく無為＝脱作品化>、「恋人たちの」の愛における<無為>、共同体のそして芸術の<限界主義>とく寛容主義>的エクリチュール、職業エリートとその「新しい召使い」との二極分裂、「組織」と経済合理性、頑張らない生活、〈半組織〉のグラデーションとく複属>、自律的共働、〈贈与〉と幸福の分有、エコマネー。

*

この文集は、以上の人間たちがほぼ2年にわたってわずか毎月一回集まった結果、紡ぎ出されたものである。従って、〈脱芸術／脱資本主義〉などという大層な名前を掲げておきながら、本来そのような射程が扱うべき問題をすべて扱っているとは到底言えないことを我々はよく承知している。非常に図式的に言うならば、〈脱芸術／脱資本主義〉的パースペクティヴは、少なくともたとえばフェリックス・ガタリのいう「エコゾフィー」の三つの領域を射程に収めなくてはならないだろう。つまり、環境、社会的諸関係、人間的主観性、である^{★7}。我々の研究会は、このうち社会的諸関係に関してはかなり集中的に議論したが、残りの二つの領域に関しては満足な議論をしていない。それは、他に十分論じられていないことも含め、今後の我々の大きな課題となる。

以下に続くテキストは、それぞれ一応個人名を冠しているが、その中身は、研究会のメンバーたちの脳が、そして生が混じり合い化学反応を起こし、そしてそれがまた各メンバーの特異性のなかで醸成された結果、書かれたものである。したがって、それらの言葉たちは、重なり合い、響き合うこともあれば、逆に、軋み合ったり、ぶつかり合ったりもして

いる。同じ言葉が、微妙に異なって解釈されている場合もある。

また、それらのエクリチュールとしての形、強度も様々である。この「ブックレット」という、商業的出版物でもなく、学会誌や紀要でもない、ある意味で「半端」な性格をもつ刊行物の特徴を活かし、それらをあえて「組織」的に統一しなかった。この〈半プロダクション〉を「寛容」な心で読んでいただければ幸いである。

註・引用文献

(現在、筆者が外国に住んでいるため、以下の書誌に原書または訳書が参照できないなど不如意な点があることをどうかご容赦いただきたい。)

☆1 — アンドレ・ゴルツ『労働のメタモルフォーズ』、真下俊樹訳、緑風出版、1997年。

☆2 — Gilles Deleuze and Félix Guattari, *Anti-Oedipus*, trans. Robert Hurley, Mark Seem, and Helen R. Lane (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1983), p. 230.

☆3 — ロベール・ボワイエ『世界恐慌』、井上泰夫訳、藤原書店、1998年。

☆4 — ジャン・ボードリヤール『透きとおった悪』、塚原史訳、紀伊国屋書店、1991年。

☆5 — 前掲書におけるゴルツの組織観に基づいている。

☆6 — この語に関しては、のちの熊倉の論考の註3の解説を参照されたい。

☆7 — Félix Guattari, *Les trois écologies*, (Paris: Galilée, 1989).

(くまくら たかあき・慶應義塾大学助教授)